

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 17 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770001

研究課題名(和文) アカデメイア派懐疑主義の哲学史的意義の解明

研究課題名(英文) Towards understanding the philosophico-historical significance of the sceptical Academy

研究代表者

近藤 智彦 (Kondo, Tomohiko)

北海道大学・文学研究科・准教授

研究者番号：30422380

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、アカデメイア派懐疑主義の哲学史的意義の解明に向けて、ヘレニズム・ローマ期の哲学諸学派による個別諸議論を、特にプラトン受容の観点から検討した。その主要な研究成果としては、カルネアデス、クリュシッポス、ムソニウス・ルフスによるプラトン受容に関する論文や学会発表、アプロディシアスのアレクサンドロス『運命について』およびアリストテレス諸伝の日本語訳がある。また、ジョン・グルッカー教授(テルアビブ大)を招いてキケロの哲学的著作に関する研究会を開催した。

研究成果の概要(英文)：This project aimed to better understand the philosophico-historical significance of the sceptical Academy by investigating several individual arguments of the Hellenistic and Roman schools of philosophy, focusing especially on their receptions of Plato. The main research achievements include several articles and conference presentations on the receptions of Plato by Carneades, Chrysippus and Musonius Rufus, and the Japanese translations of Alexander of Aphrodisias' *De fato* and of the several *Vitae Aristotelis*. The project also hosted a seminar on Cicero's philosophical works inviting Prof. John Glucker (Tel Aviv University).

研究分野：西洋古代哲学・倫理学・西洋古典学

キーワード：ヘレニズム哲学 ローマ哲学 アカデメイア派 ストア派 プラトン アリストテレス クリュシッポス カルネアデス

1. 研究開始当初の背景

古代懐疑主義の潮流にはヘレニズム期のアカデメイア派とピュロン主義の二つがあるが、従来の国内外の研究においてはどちらかと言えばピュロン主義に重点が置かれてきた。また、アカデメイア派の研究も九十年代以降急速に進展してきたとはいえ、そうした研究の注目は主として認識論上の彼らの立場に向けられており、彼らが他学派を批判するために論じた自然学・倫理学・論理学の分野の個別諸議論についての研究は散発的なものにとどまっている。こうした背景から浮かび上がってきたのが、アカデメイア派を中心にヘレニズム・ローマ期の哲学諸学派が展開した個別諸議論に目を向けた上で、その哲学史的意義をあらためて考察する必要がある、という当初の問題意識であった。

2. 研究の目的

以上の問題意識から出発して研究を進めるにあたり、鍵となる切り口として見出されたのが、プラトン受容という観点であった。ストア派やエピクロス派などヘレニズム・ローマ期の他の哲学諸学派におけるプラトン受容の重要性が近年ますます認識されるようになってきた一方で、アカデメイア派懐疑主義のプラトンへの依拠の詳細については研究上の論争が続いている。古典期からヘレニズム初期にかけてはもとより、後の古代後期の哲学におけるプラトンの特別な位置づけを考え合わせるなら、アカデメイア派をはじめとするヘレニズム・ローマ期の哲学におけるプラトン受容の検討が、その哲学史的意義の解明には不可欠だと考えられる。こうした関心のもと、本研究は、(1) 基礎資料の研究を着実にしながら、(2) ヘレニズム・ローマ期の哲学諸学派による個別諸議論を特にプラトン受容の観点から検討することを軸として、その哲学史的意義を解明していくことを目指し、(3) さらにその研究成果を広く問うべく国際交流を促進するよう努めた。

3. 研究の方法

(1) 基礎資料の研究

最新の研究状況を取り入れながら基礎資料の研究を進め、信頼できる日本語訳・注の形で発表を目指す。

(2) 個別諸議論の研究

これまで十分に研究されてこなかった個別諸議論を取り上げて、先行研究を踏まえつつ一定の解釈を提示することを目指す。こうした個別研究については、国内外の学会で発表して広く研究者の意見を仰ぎ、さらにその発表にもとづき論文にまとめて学会誌などに投稿する。

(3) 国際交流の促進

積極的に国際学会での研究発表等を行って成果を問うとともに、海外の研究者との交

流を進める。

4. 研究成果

(1) 基礎資料の研究

本研究期間中に公刊に至った成果としては、まず、アプロディシアスのアレクサンドロス『運命について』の日本語訳・注がある((I)は杉山和希氏との共訳であり、完結編となる(III)は2016年中に発表予定)。アプロディシアスのアレクサンドロスは古代最大のアリストテレス注釈者として知られているが、本著作『運命について』はヘレニズム・ローマ期における運命論をめぐる論争(決定論と自由意志の問題の古代版とも言える論争)に関する最重要の資料の一つである。特にアカデメイア派との関係について記すと、ストア派の運命論に対するアカデメイア派のカルネアデスによる批判が、アプロディシアスのアレクサンドロスをはじめとする古代後期の諸議論に持続的な影響を与えている可能性が夙に指摘されてきた。その影響を正確に見積もることは資料の制約上きわめて困難であるが、具体的には、人間の行為を自然本性的な内的原因によるものとするアレクサンドロス『運命について』15などの議論のほか(キケロ『運命について』23-25で紹介されるカルネアデスの議論と類似)、アレクサンドロス『運命について』6における観相術師ゾピュロスの逸話を用いた議論なども(キケロ『運命について』10や『トゥスクルム荘対談集』4.80に同様の議論が見られる)、カルネアデスに由来する可能性が考えられる。

さらに、岩波書店から刊行中の新『アリストテレス全集』のなかで、アリストテレス諸伝(ディオゲネス・ラエルティオス、ヘシキオス、サン・マルコ図書館所蔵写本)の日本語訳・解説を担当した。特に本研究課題との関係では、ディオゲネス・ラエルティオス版にはアリストテレスをプラトンと敵対的に描く逸話が多く含まれているのに対して、プラトン主義の立場からまとめられたと推定されているサン・マルコ図書館所蔵写本版では、アリストテレスとプラトンとの間の友好関係と哲学上の調和が強調されているという点が、古代におけるプラトン受容の一端を垣間見せるものとして興味深い。

アカデメイア派懐疑主義のもっとも重要な資料となるキケロ『アカデミカ』については、本研究の成果を反映させた日本語訳・解説の公刊に向けて、出版社と相談を進めている。

(2) 個別諸議論の研究

まず、アカデメイア派懐疑主義の中心的哲学者であるカルネアデスに関する研究として、2011年に発表した論文「カルネアデスの反正義論の射程」の改訂版のルーマニア語訳が公刊された。さらに、この論文を基礎としながらも、特にカルネアデスのプラトン受容

に関して John Glucker らによる先行研究を踏まえて再検討を加えた論文 ‘Plato against Plato?: Carneades’ anti-Stoic strategy’ を執筆した(編者・出版社に提出済)。カルネアデスの反正義論(「カルネアデスの舟板」が特に有名)については、それがプラトンの議論(特に『国家(ポリテイア)』第二巻の「グラウコンの挑戦」)を意図的に利用したものかどうかという点で、解釈が分かれている。本論文では、その可能性は低いと見る Glucker らの解釈を批判した上で、カルネアデスによるプラトン利用の哲学的意義をあらためて検討した。

また、ヘレニズム期におけるプラトン受容に関係して、初期ストア派のクリュシッポスによるプラトン『国家』の受容について検討した。その成果は、2013年8月にアテネ大(ギリシャ)で開催された第23回世界哲学会議で発表したほか(‘The birth of Stoic freedom from Plato’s Republic’), さらにその内容を発展させて、2015年4-5月にテルアビブ大およびエルサレム・ヘブライ大(いずれもイスラエル)でも発表した(‘Stoic freedom and Plato’s Republic’)(同内容の英語論文が2016年中に公刊予定)。本論文では、クリュシッポスがプラトン『国家』における「正義」の規定を「自由」の規定として読み替えることを通して、政治活動などの能動的・外向的な活動・行為の只中において成立する自由の可能性をプラトン以上に積極的に確立しようとした、とする新たな解釈を提案した。

また、上記の解釈を一つの軸にしなが、ストア派の幸福論に視野を広げてプラトン『国家』との関係を論じ、現代英語圏哲学の幸福論を参照点としながらその哲学史的意義の再検討を試みた。その成果は、2014年7月の講演にもとづいて執筆した論文「ストア派は内面的な幸福を説いたか?」としてまとめた。また、同じ内容での英語講演を、2015年5月にテルアビブ大でも行った(‘Happiness from within?: Stoic eudaimonism reconsidered’), さらに、この解釈をストア派の「自己(self)」論にも結びつけることを試み、その一端は‘Stoic eudaimonia as active self-realization’ と題した研究発表で示した。この論点は、今後さらに展開させていく予定である。

さらに、ローマ期の哲学におけるプラトン受容に関して、論文「古代ギリシア・ローマの哲学における愛と結婚——プラトンからムソニウス・ルフスへ——」を、2015年8月に行ったワークショップでの発表を発展させ、一般向け書籍の一章として発表した。ムソニウス・ルフスの結婚論は西洋の「伝統的」な結婚観と類似していることで知られているが、本論文はそのムソニウス・ルフスの結婚論を、現代における同性婚をめぐる議論を導入とする一方で、プラトンによる「愛(エロース)」の哲学にまで遡って検討した。ムソニウス・ルフスはプラトンの議論を換骨奪胎して自らの議論に用いているが、本論文は

それを、プラトンの「脱肉体化」した愛が肉体と精神の両面での愛へと展開していく過程として読み解いた。

また、ヘレニズム・ローマ期のアリストテレス主義倫理学の系譜を辿った Brad Inwood, *Ethics After Aristotle*, Harvard UP 2014 の書評を担当し、特に「古アカデメイア派」のアスカロンのアンティオコスの位置づけをめぐる、本研究との違いを明らかにする機会となった。キケロ『善と悪の究極について』第五巻におけるピソの議論は一般にアンティオコスに由来すると考えられてきたが、その伝統的解釈に Inwood は疑問を呈し、特にそのなかで論じられているテロスおよびエウダイモニアは自然本性的機能を現実化させる活動に存するとする見解について、アンティオコスに由来するものとは考えにくいと論じている。この点は、アリストテレス主義倫理学の系譜に対するストア派の影響を少なく見積もろうとする Inwood の解釈の傾向とも関係すると思われるが、自然本性的機能を現実化させる活動に価値を見出す考え方を(*oikeiōsis* ないし *cradle argument* を通して)ヘレニズム期に保持してきたのがストア派だったことを考えるならば、アンティオコスがストア哲学からの影響のもとこの考え方を再び取り上げたという解釈も十分に成り立つだろう。この点は、古代におけるストア派とアリストテレス主義の両倫理学の間の哲学的・歴史的関係を考える際に鍵となりうる論点であり、今後さらに研究を深めたいと考えている。

他に本研究に関わる成果としては、概説書『新プラトン主義を学ぶ人のために』のなかで、ストア哲学と新プラトン主義の歴史的・哲学的関係を解説するコラムを担当したほか、他分野の哲学研究者に向けて、「運命と自由の微妙な関係——ストア派は内的自由を説いたか?」と題する概説的な発表を行った。

(3) 国際交流の促進

本研究期間中、特にアカデメイア派研究の世界的権威の一人である John Glucker 教授(イスラエル・テルアビブ大)の協力を得て、有意義な研究交流を進められたのは幸運なことであった。2014年6月に Glucker 教授を招き、日本国内の古代哲学研究者も交えて研究会を開催した。本研究会ではまず、キケロの哲学的著作における翻訳の問題(キケロによるギリシア語からラテン語への翻訳、後世におけるキケロの著作の諸近代語への翻訳)という興味深い主題について、Glucker 教授の講演にもとづいて意見を交換した(その講演内容は、後日 John Glucker, ‘Cicero as Translator and Cicero in Translation’ 『フィロロギカ 古典文献学のために』10(2015), 37-53 頁として公刊されている)。さらに同研究会では、キケロ『善と悪の究極について』5.76-95 の講読セミナーを二日間にわたって行った。

この講読箇所では、幸福に対する徳の自足性という古代倫理学の中心問題をめぐって、(a) ストア派、(b) 古アカデメイア・ペリパトス派を自認するアンティオコス、(c) アカデメイア派懐疑主義の立場をとるキケロが三つ巴となる形で興味深い議論が展開されているが、この箇所の資料的な重要性と解釈上の問題点が明らかになったことは、本セミナーの貴重な成果であった。また、2015年4月下旬から5月上旬には近藤がイスラエルを訪問し、Glucker 教授のほか Ivor Ludlam 氏（ハイファ大）、Yosef Z. Liebersohn 氏（バルイラン大）らヘレニズム・ローマ哲学に詳しい同国の古代哲学研究者と意見交換を行うとともに、テルアビブ大およびエルサレム・ヘブライ大で研究発表および講演を行った。

その他、2015年11月にストア派の美学を専門とする若手研究者 Aiste Celkyte 氏（韓国・延世大学校）を招いて研究会を開催したほか、2016年3月にはヴュルツブルク大（ドイツ）で開かれたエピクロス派哲学の資料に関する文献学セミナー *Philologia philosophica Herbiopolensis IV*（Michael Erler, Holger Essler 両氏の主催）に参加し、ヘレニズム・ローマ哲学の研究に欠かせないパピルス資料（特にエピクロス派のピロデモスの著作）に関する研究動向に触れる機会を得た。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

近藤智彦 「【書評】Brad Inwood, *Ethics after Aristotle*. Pp. x+166, Cambridge, Mass./London, Harvard UP 2014」、『西洋古典学研究』、査読なし、64、2016年、170-173頁

近藤智彦 「ストア派は内面的な幸福を説いたか？」、『哲学の探求』（哲学若手研究者フォーラム）査読なし、42、2015年、2-23頁

近藤智彦 「アプロディシアスのアレクサンドロス『運命について』日本語訳・注（II）」、『北海道大学文学研究科紀要』、査読なし、145、2015年、左1頁-左32頁

近藤智彦・杉山和希 「アプロディシアスのアレクサンドロス『運命について』日本語訳・注（I）」、『北海道大学文学研究科紀要』、査読なし、142、2014年、左1頁-左32頁

〔学会発表〕（計 8 件）

近藤智彦 「古代ギリシア・ローマの哲学における愛（エロース） プラトニック・ラブから夫婦愛へ？」、ワーク

ショップ《愛のかたちはいつも同じ？ 古代から現代を照らしだす》（発表：近藤智彦・藤村安芸子、主催・司会：藤田尚志・宮野真生子）2015年8月2日、九州産業大学（福岡県福岡市）

Tomohiko Kondo, 'Stoic *eudaimonia* as active self-realization', International Conference: Self and (Its) Realization(s), 5 May, 2015, Hokkaido University (Sapporo, Hokkaido)

Tomohiko Kondo, 'Happiness from within?: Stoic eudaimonism reconsidered', The Cohn Institute's Research Colloquium, 4 May, 2015, The Cohn Institute for the History and Philosophy of Science and Ideas, Tel Aviv University (Tel Aviv, Israel).

Tomohiko Kondo, 'Stoic freedom and Plato's *Republic*', Departmental Seminar, 29 April, 2015, The Department of Classics, Tel Aviv University (Tel Aviv, Israel).

Tomohiko Kondo, 'Stoic freedom and Plato's *Republic*', Departmental Seminar, 27 April, 2015, The Department of Classics, The Hebrew University of Jerusalem (Jerusalem, Israel).

近藤智彦 「ストア派は内面的な幸福を説いたか？」、2014年度哲学若手研究者フォーラム テーマレクチャー「幸福と人生」（レクチャー：江口聡・近藤智彦）2014年7月19日、早稲田奉仕園（東京都新宿区）

近藤智彦 「運命と自由の微妙な関係——ストア派は 内的自由 を説いたか？」、ネットワーク日本哲学第二回研究会プログラム『自由と意志』（発表：近藤智彦・中嶋優太）2013年12月22日、京都大学（京都府京都市）

Tomohiko Kondo, 'The birth of Stoic freedom from Plato's *Republic*', XXIII World Congress of Philosophy, 8 August, 2013, The University of Athens (Athens, Greece).

〔図書〕（計 5 件）

近藤智彦 「第1章 古代ギリシア・ローマの哲学における愛と結婚 プラトンからムソニウス・ルフスへ」、『藤田尚志・宮野真生子（編）『愛 結婚は愛のあかし？』（愛・性・家族の哲学 第1巻）ナカニシヤ出版、2016年、2-35頁

近藤智彦 「展開δ ストア哲学」、水地宗

明・山口義久・堀江聡（編）『新プラトン主義を学ぶ人のために』、世界思想社、2014年、146-151頁

Tomohiko Kondo (translated into Romanian by Marina Țicmeanu), ‘Scândura lui Carneade’, Shunzo Majima & Emanuel-Mihail Socaciu (eds.), *Filosofia japoneză azi*, Editura Universității din București, 2013, 107-126. [近藤智彦「カルネアデスの反正義論の射程」、『ギリシャ哲学セミナー論集』8(2011), 25-37頁の改訂版のルーマニア語訳]

近藤智彦「アリストテレス諸伝（ディオゲネス・ラエルティオス、ヘシキオス、サン・マルコ図書館所蔵写本）」[日本語訳・解説] 内山勝利・神崎繁・中畑正志（編）『アリストテレス全集 1』、岩波書店、2013年、191-245頁、323-329頁

Tomohiko Kondo, ‘Chrysippus’ criticism of the theory of justice in Plato’s *Republic*, in Noburu Notomi & Luc Brisson (eds.), *Dialogues on Plato’s Politeia (Republic): Selected Papers from the Ninth Symposium Platonicum*, Academia Verlag, 2013, pp. 366-370. [Tomohiko Kondo, ‘Chrysippus’ criticism of the theory of justice in Plato’s *Republic*’, International Plato Society, IX Symposium Platonicum, Plato’s Politeia, Keio University, Tokyo, 2-7, August, 2010, Proceedings Vol. 2 (2010), pp. 54-58 の改訂版]

〔産業財産権〕

なし

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤 智彦 (KONDO Tomohiko)

北海道大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：30422380

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし